『マクベス』——人間判断について(2)

山田直道

前稿[1]においては、『マクベス』劇の骨格を形成する三殺人のなかで、筋書の流れに従って、第一の殺人であるダンカン殺しをとりあげ、夫の性格に対するマクベス夫人の人間判断から生じる夫への言葉、行為、及び、夫人の性格に対するマクベスの誤った人間判断と、それに基づく暗殺への踏み切りを論じることによって、ダンカン暗殺に至る場面では人間判断が主役を務めていると考えられることを述べたが、本稿においては、その後に続くバンクォー殺しと、マクダフ夫人とその息子殺しで、果してどのような人間判断がどのように生まれるのか生まれないのか、そしてそれがどのように機能し結果していくのかいかないのか、その質的変化及び推移を、ダンカン暗殺における人間判断との比較を通じて検討し、それによってどのような意味がこの『マクベス』劇に付与されるのかを全曲的に追求してみたい。

1　バンクォー暗殺

果してバンクォー暗殺では、ダンカン暗殺と同じように人間判断が主役を務めているであろうか。それともそれは脇役へと退き、主人公の注意は他に移っているのであろうか。殺人を躊躇する原因の一つに人間判断が存在したのがダンカン暗殺であったとするならば、バンクォー暗殺でも人間判断はやはり暗殺をためらう要因としてあるのであろうか。それとも、それは相異なる機能を果しているのであろうか。とまれ、第二の殺人であるバンクォー暗殺を劇の筋書に沿って順に追ってみよう。

バンクォー暗殺の出発点は、ダンカン暗殺で既述したように、やはり一幕一場冒頭の三人の魔女による短い相談へと遠く遡ることができよう。その中にみられる "There to meet with Macbeth." (I. i. 7)[2] の台詞どうり、そこでは、マクベスに出会う予定は語られてもバンクォーに会う予定は語られず、従って、マクベスに同行し、フォリスへの帰途につく途中、バンクォーは、予定通り魔女がマクベスに対して一方的に行う既述したような予言を直接耳に入れることになり[3]、一方、バンクォーに会う予定のなかった魔女が、乞われるままにマクベスとの比較に立った予言をバンクォーにも行うことによって、マクベスも又バンクォーへの魔女の言葉を直接聞く機会を得ることになる。即ち、マクベスに対する "All hail, Macbeth! that shalt be king hereafter!" (I. iii. 50) という予言はバンクォーの知るところとなったわけだし、バンクォーへの予言 "Thou shalt get kings, though thou be none:" (I. iii. 67) も直接マクベスの耳に入ったわけであり、お互いに、

Mach. Your children shall be kings.
Ban. You shall be King.
Mach. And thane of Cawdor too; went it not so?
Ban. To th' selfsame tune, and words. (I. iii. 86—8)

と述べあうことによって、二人の間には、相互に熟知する彼らだけの秘密の世界がつくりあげられてゆくことになる[4]。たとえば、ダンカン暗殺の際に、あれ程相談し論争したマクベス夫人に対しても、マクベスは魔女との出会いの場で一緒であったバンクォーには一言も言及しておらず ("They met *me* in the day of success;" (I. v. 1)——イタリックス筆者——以下同じ)、バンクォー暗殺の件についても最後まで曖昧にしたままであって、これ程他の人物を厳しく疎外する二人だけの世界であるのだが、それは、それ以降の筋書においてどのように展開するであろうか。魔女が姿を消したあと、"Were such things here, as we do speak about,/Or have we eaten on the insane root,/That takes the reason prisoner?" (I. iii. 83—5) と述べて魔女の存在すら疑問視する理性的なバンクォー、"That, trusted home,/Might yet en-

kindle you unto the crown./Besides the thane of Cawdor." (I. iii. 120—3) とマクベスをたしなめて予言に対し公然と懐疑的な態度をとるバンクォーと、"Two truths are told./As happy prologues to the swelling act/Of the imperial theme." (I. iii. 127—9) と傍白し、魔女の予言に秘かに虜となるマクベスが対照的に描かれたのち、マクベスとバンクォーとの間に、次の対話、

Macb. Think upon what hath chanc'd, and at more time,
The interim having weigh'd it, let us speak
Our free hearts each to other.
Ban. Very gladly.
Macb. Till then, enough. (I. iii. 154—7)

が交され、二人は今後も、予言について自由に腹蔵なく話し合うことを約束するのである。その相談は、ダンカンがマクベスの居城を訪問した晩、マクベスがダンカン暗殺を実行しようとする直前に、息子フリーアンスを伴い、眠ると "cursed thoughts" (II. i. 8) に届するので眠りたくないとバンクォーが述べたのち、二人が出会い、次のように行なわれる。

Ban. I dreamt last night of the three Weird Sisters:
To you they have show'd some truth.
Macb. I think not of them:
Yet, when we can entreat an hour to serve,
We would spend it in some words upon that business,
If you would grant the time.
Ban. At your kind'st leisure.
Macb. If you shall cleave to my consent, when' tis,
It shall make honour for you.
Ban. So I lose none
In seeking to augment it, but still keep
My bosom franchis'd, and allegiance clear,
I shall be counsell'd. (II. i. 20—9)

既にマクベスがダンカン暗殺を決意し、準備完了の合図である鐘の音を待って実行しようとしているところであり、それとは知らないバンクォーを、魔女のことは考えていないと述べて欺きつつ一味に誘いこもうというマクベスのしたたかさがこの対話の中に読みとれるであろう。魔女の予言を互いに知っていることから生じた二人の秘密の世界がこのように展開してきたときにダンカン暗殺事件が起こってマクベスは王位に就いたが、バンクォーは秘かにマクベスに対し二人だけの世界ゆえに、

"Thou hast it now, King, Cawdor, Glamis, all,/As the Weird Women promis'd, and, I fear,/Thou play'dst most foully for 't; yet it was said/It should not stand in thy posterity; /But that myself should be the root and father/Of many kings. If there come truth from them——……—/Why, by the verities on thee made good,/May they not be my oracles as well,/And set me up in hope?" (III. i. 1—10)

と疑念を抱き、自分への予言も成就するようにとの希望を述べるが、その直後に王としてのマクベスから宴会出席の要請をうける。そして、その要請の言葉の合間に、"Ride you this afternoon?" (III. i. 19), "Is 't far you ride?" (III. i. 23), "Goes Fleance with you?" (III. i. 35) と、マクベスがバンクォーの馬の遠乗り計画にさぐりを入れるための質問が挿入され、マクベスがバンクォー殺害を既に意図していることが判明する。それは、暗殺者に向って、"Was it not yesterday we spoke together?" (III. i, 73) と問い正すことからも明白である。そしてその暗殺の動機の一つは、バンクォーの性格に対する次のような恐怖なのである。

Mach. To be thus is nothing;
But to be safely thus:
Our fears in Banquo
Stick deep, and in his royalty of nature
Reigns that which would be fear'd: tis much he dares;
And, to that dauntless temper of his mind,

He hath a wisdom that doth guide his valour
To act in safety. Here is none but he
Whose being I do fear: (III. i. 47—54)

そしてそれに引き続く台詞の中でも、彼は、バンクォーの子孫のためにダンカンを暗殺したという、魔女の予言にとらわれた見方をして二人だけの秘密の世界から抜け出せないでおり、従って、バンクォーの大胆不敵で賢明な性格に恐怖感を覚え、魔女の予言がバンクォーに成就することを阻止しようとしてバンクォー暗殺を計画したことが明らかとなる。即ちバンクォー暗殺における人間判断は、ダンカン暗殺のように殺人を思い止まらせるのとは逆に、それへと駆り立てる要因の一つをなしており、ここに、ダンカンに対する人間判断の役割と異なり、二人だけの秘密の世界が形成されるや、闇討という秘かな暗殺方法によってその世界を文字通り暗闇の中（="It will rain to-night" (III. iv. 16)）へと葬り去る積極的な動機となっている人間判断の機能を発見することができよう。即ち、ダンカン暗殺に制動をかけたのは人間判断であったのが、バンクォー暗殺へと推進するのも人間判断であるという風に、人間判断のそれぞれの暗殺に対する役割が正反対に設定されているのであり、バンクォー暗殺では、その上、完璧な殺人へと進まないかもしれない要因として新たに暗殺者の説得が必要な外的状況があることが明示される、それは、後述するように、暗殺行為と自己目的との直結を願望するところから生まれたのかもしれないが、一つには、暗殺者に対する不信であり、それは、練達の暗殺者が後から殺害現場に加入することで[5]一層際立ってくる。即ち、暗殺の対象者バンクォーへの人間判断ゆえの恐怖から殺害計画立案へと進みながら、その暗殺を実行する刺客にバンクォー暗殺の正当な理由が自分と共通して彼らにもあるよう説く手続きを省略するわけにはいかないということになる。これは、主人公マクベスの心の中での暗殺思い立ち、計画、そして実行という過程で、既に行為へと踏み切った段階に入り込んでおり、彼自身は最早悩んでいないことの、内面的領域は終了し外面的問題に進んでいることのあらわれであろう。暗殺の技術的領域に立ち至っているといえるのである。従ってダンカン暗殺にあれ程逡巡し懊悩したマクベスは、次のバンクォー殺害では一度も心理的にた

めらうことはないといってよい。ただ目的を確実に実行するために、暗殺技術の整備に精力を集中しているようにみえるのである。馬の遠乗りに行くバンクォーへの巧みな探査、刺客にとってもバンクォーが自分と共通の敵であるとの説得の方法、具体的な襲撃場所と正確な時間の教示、暗殺に熟達した第三の刺客の派遣等、皆舞台上のアクションとしては、暗殺の目的をいかに完璧に達成するか、ダンカン暗殺で、夫人から実際的方法を教えられなければ実行へと踏み切れなかった程のマクベスが、当の夫人を疎外して[6]自ら立案した計画をいかに上手に実行するかに力点を移しているといえよう。従って、ダンカン暗殺での「目的」→「躊躇」→「実行」の図式は、バンクォー暗殺において、実行へのためらいの原因としてではなく、逆に、実行への動機としての人間判断という、行為との関連における人間判断の質的変化を伴っているのであり、そこには、実行行為自体への人間的な逡巡は全くみられないと言ってよく、魔女の予言、即ち二人だけの世界に束縛された結果であると同時に、主人公マクベスの悪党性の深化が明瞭となるであろう。

2　マクダフ夫人と息子の暗殺

第三の殺人であるマクダフ夫人とその息子の暗殺を考察するためには、その張本人であるマクベスとマクダフの人間関係[7]の内容を検討しなければならない。それは、マクベスがダンカンを殺害した直後、城の南門を叩いてマクベスを驚愕させ、ダンカンを目覚めさせるために来城したのはマクダフであり、ダンカンの寝室へ案内しようとのマクベスの申し出を断りダンカンの部屋に単身赴いてその暗殺を最初に発見したのもマクダフであり、国王殺しの反逆を叫んで全員を起こし、ダンカンの息子たちに父親が殺害されたことを具体的に伝え、部屋付の家来を斬り殺したマクベスを詰問するのもマクダフなのであり、ダンカンの死後、スクーンで行われるマクベスの戴冠式に参列せずファイフの居城に戻ってしまうのも、又、宴会出席を断ったのもマクダフであった。その彼に使者を送り、重ねて参上を拒否されたマクベスは、魔女の呼び出した第一の幻影の言葉 "Macbeth! Macbeth! Macbeth! beware Macduff; /Beware the thane of Fife." (IV. i. 71—2) を聞いて、"Thou hast harp'd my fear

aright."(IV. i. 74) と、忠告に感謝しつつマクダフへの不安を幻影が言い当てたことを述べる。そして直後に、マクダフのイングランド逃亡をレノックスより報らされると、

Mach. [*Aside.*] Time, thou anticipat'st my dread exploits:
The flighty *purpose* never is o'ertook,
Unless the *deed* go with it. From this moment,
The very firstlings of my heart shall be
The firstlings of my hand. And even now,
To crown my *thoughts* with *acts*, be it thought and *done*:
The castle of Macduff I will surprise;
Seize upon Fife; give to th'edge o'the sword
His wife, his babes, and all unfortunate souls
That trace him in his line. No boasting like a fool;
This *deed* I'll do before this *purpose* cool:
(IV. i. 144—154)

と傍白して、心に浮んだことは即刻実行であると宣言し、直ちにファイフのマクダフの居城を襲撃し、妻子、血縁者を皆殺しにすることに決め、時間に先を越され、暗殺を予定していたマクダフに逃げられたために、目的（＝"purpose"）と実行（＝"deed", "acts"）の間に瞬時も入りこむ余地をなくそうとのマクベスの決意が表明されているのであって、これは即座に実行に移される。その際、バンクォー暗殺と異なり刺客の説得もなく、ましてや躊躇逡巡もなく、マクダフの妻子を、暗殺してしまうのである。

マクダフに不安を覚え、幻影の警告も的を射たものではあったが、思いがけず届いたマクダフの逃亡の報せが、妻子一統抹殺へと主人公を一気に駆り立てることになる。そこでは、「目的」と「実行」の内的及び時間的距離が一層短かくなり、「目的」即「実行」の様相が色濃く滲み出ているといえよう。従って、マクダフに対する人間判断は "fear" の一語であり、更に妻子に対するそれは皆無であって、マクベスの関心は、妻子襲撃では、いかに時を移さず暗殺するかの問題に集中し、そこには一片

の躊躇すらみえず、「目的」と「実行」とが彼の中で同一義的に重なっているのである。

3　三殺人における人間判断の役割

このように、この悲劇の骨格であるダンカン暗殺、バンクォー暗殺、マクダフの妻子暗殺に対し、人間判断の観点から考察を試みてきたが、ダンカン暗殺でマクベスの逡巡に大きな根拠を与えていた人間判断は、バンクォー暗殺において逆に暗殺推進の大きな要因へと機能的に変容し、遂にマクダフ夫人と息子殺しでは、二人に対する人間判断は存在せず、マクダフに抱いていた不安（人間判断）を解消できないことから生じる衝動的で機械的な殺人へと結果してゆくのである。言い換えれば、ダンカン暗殺では、殺人目的が形成された後に人間判断が行なわれてためらい、一度は思い止まりながら、既述した人間的文脈での複雑なマクベス夫人との絡み合いのなかで遂に暗殺を決意して実行へと踏み切るのであり、目的形成→人間判断形成→躊躇→実行という内容及び事柄の順序であるが、バンクォー暗殺では人間判断が先行し、それに従って殺人目的が形成され、しかる後に実行に移されるわけであるから、人間判断→目的形成→実行の内容及び事の順序であり、マクダフ夫人と息子の暗殺は、不安ゆえのマクダフ暗殺計画（="strange things," "dread exploits"）が対象者のマクダフの逃亡により坐折した結果に起因しており、そこに人間判断がみられないために目的形成→実行という内容と事の順序を見せていると言えよう。図式的に整理してみると、

一、ダンカン暗殺

目的形成(A)→人間判断(B)→躊躇(C)→実行(D)

二、バンクォー暗殺

人間判断(B)→目的形成(A)→実行(D)

三、マクダフ夫人とその息子暗殺

目的形成(A)→実行(D)

ということになり、筋書の流れに従うと、この三殺人は、A→B→C→DからB→A→Dへと移行し、そして遂にB→Dだけとなり、まずAとBが逆転してCが消え、最後にはCはおろかBすらも消えるという推移、変化をみせているのであり、前稿で指摘したように、この三殺人は、それぞれの時々場所におけるマクベス像を把握させ、その三殺人を個別的に辿ることが彼の性格と心の変化を

迎ることになるとするならば、そこに、殺人へと踏み切ることを思い止まらせる人間判断が殺人へと駆り立てる人間判断へと機能的になり変って逡巡が失せ、そしてその人間判断すらも存在しなくなってゆく主人公の悪党性の鮮明な深まりをとりあえず読み取ることが可能になるであろう。[8] だがしかし、A→B→C→Dが遂にA→Dのみへと変る主人公、中間の内容であるB、Cを最後に失うマクベスは、前に少し触れたように、A→Dの問題即ち「目的」と「実行」の内面的距離を、最初から意識していたのではなかったろうか。人間判断は、その距離の長短を決定するという重要な役割を担っているのではないだろうか。そこで、三つの暗殺をこの角度から検討してみることにしよう。

4 「目的」と「実行」の狭間

ダンカン暗殺においては、前稿で指摘した通り、人情豊かな夫マクベスは、暗殺行為自体を恐れているとの人間判断、"that which rather thou dost fear to *do*,/Than wishest should be *undone*". (I. v. 24—5) を持つに至ったマクベス夫人が、"Hie thee hither,/That I may pour my spirits in thine ear,/And chastise with the valour of my tongue/All that impedes thee from the golden round." (I. v. 25—8) と述べて、「言葉の力」で、夫マクベスのダンカンに対する人間判断に基づく躊躇を駆逐しようとし、一方マクベスは、ダンカン暗殺の考えが心に浮んでのち、ダンカンが自分の城を訪問する機会を捉えて暗殺を実行しようと思いつめ、かつ逡巡する。

Mach. If it were *done*, when 'tis *done*, then 'twere well
It were *done* quickly:
(I. vii. 1—2)

彼の心理的状況が実は巧みに表現されていよう。確かに、T・イーグルトンの言うように、[9] 求めようとして得られない行為の自己完結性に対する苛立ちの表現と考えられるが、同時にそれは、その前でマクベスからの手紙を読んだマクベス夫人がダンカン暗殺を即座に思いついたときの台詞 "Come, you spirits……Stop up th' access

and passage to remorse;/That no compunctious visitings of Nature/Shake my fell *purpose*, nor keep peace *between*/Th' *effect* and it!" (I. v. 40—7) にみえる「目的」(="purpose") と「実行」(="effect") の距離 (="between") の意識と軌を一にする、「実行」を前にした人間の心理的状況の表現でもあろう。そして彼には、ダンカン暗殺という「目的」(="intent") を「実行」へと駆り立てるもの (="spur") として、最早野心 (="ambition") のみしかないのであり、遂に断念しようとする (="We will proceed no further in this business.") (I. vii. 31) が、前稿で考察したような経緯で結局暗殺決行を決意する (="I am settled, and bend up/Each corporal agent to this terrible *feat*." (deeds of great wickedness)[10]) (I. vii. 80—1) のである。そして暗殺へと赴く直前の空中の短剣の場面の終りで、

Mach.　　Whiles I threat, he lives:
Words to the heat of *deeds* too cold breath gives.
I go, and it is *done*; the bell invites me.
Hear it not, Duncan; for it is a knell
That summons thee to Heaven, or to Hell.
(II. i. 60—4)

と述べて、高潔な王であるなら天国へ昇るはずであるのに、マクベスの心の中では、ダンカンへの人間判断はきっぱりと処理された結果、天国と地獄のどちらに行くかは既に問題外となっており、彼の心を占有する問題は「実行」(="I go, and it is *done*.") だけであることを如実に物語っていよう。そして舞台外での暗殺ののち再登場したマクベスの最初の台詞は、"I have *done* the *deed*." (II. ii. 14) であり、尾を引く暗殺行為への後悔は、"I am afraid to think what I have *done*;" (II. ii. 50) であり、"To know my *deed*, 'twere best not know myself." (II. ii. 72) で表現されている。このように、暗殺目的を保持しながらダンカンの高潔な性格への人間判断ゆえに実行を躊躇したマクベスが、究極的に実行に踏み切る経過を詳細に振り返ってみると、そこには、「目的」と「実行」の内面的距離に意識の焦点を絞っているマクベスの姿が明瞭に浮び上ってくるであろう。

それでは、バンクォー暗殺におけるマクベスは、「目的」と「実行」の狭間でどのような姿を我々にみせているであろうか。彼は前にのべた通り、夫人に対してバンクォー暗殺を具体的に知らせずに次のように暗示的に言うにとどめる。[11]

Mach. Then be thou jocund……there shall be *done*
A *deed* of dreadful note.
Lady M. What's to be *done*?
Mach. Be innocent of the knowledge, dearest chuck,
Till thou applaud the *deed*.
(III. ii. 40—6)

そして、暗殺者は、バンクォー暗殺後に、"Well, let's away,/And say how much is *done*." III. (iii. 22—3) とのべてマクベスに仕事の結果を報告するのである。「目的」はバンクォーに対する人間判断より生まれ、前述したようにバンクォーを、暗殺者と自分の共通の敵であるとの説得を行って彼らと自分とを一体化させただけではなく、襲撃現場に腹心の第三の暗殺者を派遣することにより、更に暗殺行為自体と自分とを緊密に結びつけてまで「実行」へと突き進むのであり、その意味で、時間的、外面的に手間はとるけれども、「目的」と「実行」の内面的距離は、逡巡が欠けただけ一層真直ぐに近接の度を増していると言えよう。それでは、第三の暗殺であるマクダフ夫人と息子殺しでの「目的」と「実行」はどのような様相を呈しているであろうか。"Strange things I have in head, that will to *hand*,/Which must be *acted*, ere they may be scann'd." (III. iv. 138—9) と、マクダフ暗殺を意図し、即座に実行に移そうとしていたマクベスは、その矢先にマクダフ逃亡の報せを受けて、既述した通り、心に思いついたことは即刻実行の手に移すことを決意し、暗殺者を急派してマクダフの妻子を殺害するのである。その間の心的距離は、彼女らを訪れた無名の使者[12]が、危険が切迫しており避難するようにと警告を発した直後の暗殺にみえる通り、二人が逃亡する間もない程の短かさであった。

このように、三殺人だけをとりあげても、そこには、「目的」と「実行」の間の内的距離を常に心の中で意識している主人公の姿がくっきりと浮び上がるばかりか、

その間の距離を筋書の進行に従って短縮してゆき、それは人間判断ゆえに内面的距離が拡大し、縮めるのに悩む場合と、人間判断ゆえに、その距離が縮小する場合と、人間判断が欠如したために距離が零になる場合とに分けることができよう。従って、人間判断は、「目的」と「実行」の狭間に佇む主人公のその間の心理的距離を、それぞれの時と場所において決定する役割を果していると言うことができよう。そう言えば、この劇中で主人公マクベス以外の人物の口をついて「実行」の言葉が次々と出てくる事実はやはり注目に値するであろう。既に挙げた例を除き順に列挙してみると、

2 Witch. When the hurlyburly's *done*, (I. i. 3)

Rosse. I'll see it *done*. (I. ii. 68)

Dun. Is execution *done* on Cawdor? (I. iv. 1)

Lady M. Alack! I am afraid they have awak'd,/ And 'tis not *done*: Th' attempt and not the *deed*/ Confounds us. (II. ii. 9—11)

Lady M. Had he not resembled/My father as he slept, I had *done* 't. (II. ii. 12—3)

Lady M. These *deeds* must not be thought/After these ways: (II. ii. 32—3)

Lady M. A little water clears us of this *deed*: (II. ii. 66)

Len. Those of his chamber, as it seem'd, had *done* 't: (II. iii. 101)

Old M. 'Tis unnatural,/Even like the *deed* that's *done*. (II. iv. 10—11)

Rosse. Is 't known, who *did* this more than bloody *deed*? (II. iv. 22)

Macd. Well, may you see things well *done* there: (II. iv. 37)

Lady M. what's *done* is *done*: (III. ii. 12)

Lady M. What's to be *done*? (III. ii. 44)

Hec. O, well *done*! I commend your pains, (IV. i. 39)

All. *A deed* without a name. (IV. i. 49)

L. Macd. What had he *done*, to make him fly the land? (IV, ii. 1)

L. Macd. I have *done* no harm. (IV. ii. 73, 78)

Lady M. Why, then 'tis time to *do* 't. (V. i. 35)

Lady M. What's *done* cannot be *undone*. (V. i. 65)

Doct. unnatural *deeds*/Do breed unnatural troubles: (V. i. 68—9)

Macd. either thou, Macbeth,/Or else my sword, with an unbatter'd edge/I sheathe again *undeeded*. (V. vii. 18—20)

Siw. The day almost itself professes yours,/And little is to *do*. (V. vii. 27—8)

Mal. What's more to *do*,/Which would be planted newly with the time, (V. ix. 30—1)

となり、この劇の冒頭から終局まで、主要人物から端役に至るまで「実行」の言葉が公平に配当されているのである。このように、全曲的な視点に立つとするならば、『マクベス』は、人間判断を内的距離の決定要因とする「目的」と「実行」の劇、即ち、"To *do*, or not to *do*: that is the question:" の劇であると考えることができると思われ、[13]『ハムレット』が、父親の復讐ができないことの全篇的表現である To *be*, or not to *be*: that is the question:" (III. i. 56) の劇である[14]ことと好対照をみせていると言えよう。ほぼ同時期に書かれたこの二つの悲劇において、「目的」と「実行」の狭間に立つ主人公が、一方は結局行為へと踏み切り続けるのに対し、他方は、行為に踏み出せないかわりに生と死の問題に捉われている姿をみせていることは、結局、「目的」と「実行」の間の内的距離の問題を、ともに提示しているのであり、これは極めて興味深いことと言わねばならない。『マクベス』における人間判断の全篇的な意味とはこのようなことなのである。

(1) 「『マクベス』——人間判断について(1)」『一橋論叢』第七十七巻第二号、昭和五十二年二月、六十一頁—七十五頁参照。

(2) 使用テキスト、及び本論における引用は、K. Muir (ed.), *Macbeth*, The Arden Edition (Methuen Harvard, 1965) に拠る。

(3) G・ウィルソン・ナイトは、悪に係るのは脇役の人物群だけでなく、"it is a bond of evil between him (Banquo) and Macbeth." (*The Wheel of Fire*, Methuen,

1964, p. 151) であると言う。

(4) A・C・ブラッドレーは、バンクォーとマクベスの二人の世界について、"He (Banquo) alone of the lords knew of the prophecies, but he has said nothing of them." (*Shakespearean Tragedy*, Macmillan, 1964, p. 324) と言及する。

(5) 第三の暗殺者については、マクベス説、待者説、ロス説等があるが、ミュアはこれらの見解に否定的である。テキスト、九十頁、注参照。

(6) 五幕一場での「夢遊病の場」において、マクベス夫人は、"I tell you again, Banquo's buried: he cannot come out on's grave." (V. i. 60—1) と口走るが、バンクォー暗殺以前に、その計画を彼女は知ることはない。

(7) 「人間関係」については、T・イーグルトン、*Shakespeare and Society* (Chatto and Windus, 1967) が示唆に富む論考である。イーグルトンは、我々の経験を通してシェイクスピアの提示する諸問題を吟味することを主張し、自己と他者（社会）との緊張関係に的を絞り、個としての人間は、他者（社会）との関係において定義されると言う。筆者は、前稿で述べたように、シェイクスピアの劇作態度の中に、舞台上の人物関係という観客側の視点とは異なる、舞台上の人物がみる人間関係の視点を看取したいのであり、関係の内容を考察の対象とする。

(8) 悪党性の深化と主人公への共感の問題については、殺人へと踏み切らざるを得ない理由の詳細な検討が必要となろう。

(9) T・イーグルトン、前掲書、百三十一頁。

(10) A・シュミット、"*Shakespeare Lexicon*" (Walter De Gruyter & Co., 1962), p. 408.

(11) 注 (6) 参照。

(12) ミュアの指摘通り、全ての人物がマクベスの悪に染っているわけではないことを、使者は想起させる。テキスト、百二十四頁、注参照。

(13) 例えば、L・B・キャンベル、"*Macbeth: A Study in Fear*" (*Shakespeare's Tragic Heroes*, Barnes & Noble, 1961) や、C・ブルックス、"*The Naked Babe and the Cloak of Manliness*" (*The Well Wrought Urn*, Harcourt, Brace & World, Inc., 1975) 等、作品解釈は様様である。今世紀の作品研究の動向については、G・K・ハンター、"*Macbeth' in the Twentieth Century* (*Shakespeare Survey 19*, Cambridge University Press, 1974, pp.1—11) が参考になる。

(14) 拙稿「『ハムレット』論」『一橋論叢』第七十三巻第三号、昭和五十年三月、六十七頁—八十頁参照。

（一橋大学助教授）